森のピアニスト

シロガネユキ

森のピアニスト

「森のピアニスト」　シロガネ　ユキ

母さんはもっとピアノの練習をしなさいと言う。

毎日毎日、練習曲の繰り返し。前はピアノを弾くと褒めてくれたのに、最近はちっとも褒めてくれない。あそこが悪いとか、ここがイマイチとか、そんな事ばかり。

母さんは他人に僕を自慢したくて仕方が無いみたいだ。最近はピアノをみるのも嫌になった。

何時の間にか、僕の音は死んでしまった気がする。大人は僕のピアノを聴いて拍手をくれるけど、僕の心は満たされなかった。弾けば弾くほど、ピアノが嫌いになった。

ある夏の日、僕と母さんは地方で催されるコンクールに出場する為、電車で二時間かけて会場に向かった。

会場の周りは公園になっていて、木がいっぱいあった。コンクールに出場するよりも外で遊びたかったけれど、母さんが強く手を引っ張るので諦めた。辺りにはセミの抜け殻が沢山あったので、手にとって自分の胸にブローチみたいにくっつけた。

みっともないからやめなさいと言われたけれど、僕は外さなかった。

自分が出るまでまだ時間があったので、僕は母さんの目を盗んで外へ出た。

すると、どこからかとてもいい香りがしてきた。

「何の香りだろう……いいにおいだ」

僕は香りのする方へ向かった。すると何時の間にか目の前に大きな森が現れた。

どうやら香りはその森の中から漂ってくるようだ。恐る恐る森の中へ足を踏み入れた。

森の奥へ進むたび、そのいい香りは濃くなっていく。森の中には色々な動物がいた。リスやイタチが生き生きと木々の間を駆け回っている。小鳥がさえずり、虫達も楽しそうに飛び回っていた。

僕は思いっきり両手を伸ばして深呼吸をした。空気がとても美味しく感じた。上を見ると木々の葉の間から、キラキラと太陽の光が零れ落ちている。眩しくて目を細めたけれども、ほんのり見える空が青々としてきれいだった。

何だかとても気持ちがよくなって、僕はそのまま、駆け足で森の奥へと進んだ。

不思議な事に、ある場所から急に、周りに生えている木の種類が変わりはじめた。変な形の木が僕の周りを取り囲んでいる。少し不安だったけど、更に奥の方へ進みつづけた。

すると急に視界が開けて、ちょっとした空間に出た。そこには僕が毎日目にしている物が置いてあった。

ピアノだ。

でもそのピアノにはピアノの弦がない。いつも使っている黒塗で光沢のあるピアノと違って、森の木をつなぎ合わせてつくったようなものだった。椅子には変な種類の大きなサルが座って、こちらを向いている。そして僕の顔を見ると、にた〜っと笑った。

サルの歯並びがあまりにも悪くて、僕は何だか可笑しくなり、つられてにた〜っと笑った。

ふと見ると、ピアノの中にも、もういっぴきサルがいた。

そちらは一回り小さくて、蓄音機の先のラッパみたいなものを大事そうに持っている。大きなサルとは違って、とても真剣な顔をしていた。これから大事な仕事をするような緊張した雰囲気があった。

不思議そうに彼らを眺めていると、大きな方のサルがクルリとピアノの方に向いて鍵盤をたたき始めた。

そのピアノからは音が出なかった。音の代わりに小さいサルが持っているラッパの先から、色とりどりの花がモクモクと出て、空に向かって飛んでゆくのだ。

僕は驚いて、ただただ、その飛んでいく花を見守っていた。

花は暫くの間、空中に浮かんでいるのだが、そのうちプチンと鳴って空気中に消えてゆく。

まるでシャボン玉のようだ。

そしてその花が一つ割れる度に、何ともいえないいい香りが辺りを包み込んだ。

演奏は五分くらい続いた。大きなサルは一通りピアノを弾き終わると、とても満足したような表情を浮かべた。

僕は思わずそのサルに向かって拍手を送った。するとサルは再びこちらを向いて、にた〜っと笑った。

ピアノの中にいた険しい顔をしたサルもムクっと起き上がって、にた〜っと笑った。

僕も彼らに向かって、にた〜っと笑った。

僕はそのサル達に話し掛けようとした。こんなところで何をやっているの？　いつもここでピアノを弾いているの？　ここに住んでいるの？　と、色々な質問をしてみたい気分だった。

でも声を掛けようとした瞬間、自分のステージの事を思して僕は青くなった。

もう出番まで時間がない。サル達にぺこりとお辞儀をすると、僕はその場を走り去った。時計を見ると出番まであと五分ない。会場に向かって必死に走った。

何とかギリギリ間に合った。母さんはすごい剣幕で怒っていたけど、気分が悪くてトイレで休んでいたのだというと、仕方の無い子ねとあきれたように笑った。

ステージに立った。みんなの前でぺこりとお辞儀をして、ピアノに向かう。そして深呼吸をしてから、ゆっくりと

最初の音を出した。森の空気と同じくらい澄んだ音が会場に響き渡った。

僕はそのまま演奏を始めた。音を一つ奏でる度に、ピアノからシャボン玉のような花が零れ落ちるような気がした。

最後の音を弾き終わって、鍵盤からゆっくり指を離すと、会場に来ていた人たちから、これまでにないくらい大きな拍手をもらった。

僕は思わず、客席の方に向かって、にた〜っと笑った。

審査員の人たちも僕の顔を見て、にた〜っと笑っていた。

僕はそのコンクールで見事優勝をした。母さんは「あの笑顔はいけてないけど、今日の出来はすばらしかったわ」と珍しく褒めてくれた。

僕は両手一杯の花束を受け取った。そしてその足で、再び外へ向かった。

あの森のピアニストさんにも、花束をあげようと思ったからだ。

でも森に行こうと会場を出ると、そこにはもう森はなかった。

僕は暫くの間、森のあった場所を見つめていた。

――あれから三十年が経った。現在はピアニストとして忙しい日々を送っている。公演のスケジュールが過密になり、精神的な余裕がなくなると、僕は必ず、あの森にいた不思議なサルのピアニストを思い出す。

あれは結局何だったのだろう。子供だけに見える、幻だったのだろうか。

僕はそんな風に思いながら窓の外に目をやった。

空はあの時ほど青くないけれども美しい。思わず部屋の窓を開けた。空気がいつもより美味しく感じた。

ふと、あの森の中からした香りが僕を包み込んだような気がした。気のせいだろうか。僕は静かに深呼吸をした。だが、もうあの香りはしなかった。

僕はもう一度空を見上げると、両手を上げて、にた〜っと笑った。

青い空も白い雲も、大きな太陽もにた〜っと笑ったような気がした。

了

★　今回この話を書く際にモチーフとさせていただいたのはイラストレーター村尾 亘様の絵「Requiem」です。ご協力有難うございました！　★